

特 別
14
3157
14(1)



14
3157
14
(1)

存し御遊の川もたのむ
其の彼唐の如き人あり
大和殿のあめしむは
其の女もあつてあつたの
汗はくもつて聞かぬ上
其の女もあつてあつたの
其の女もあつてあつたの
其の女もあつてあつたの

51

存くは難滞といふはあま
其は後唐に於て多しと云ふは
大和親のあはれなるに
其のほかにあはれなるの句
評區に於ては間高上中
何れにてもあはれなるに
能く能く能く能く能く
能く能く能く能く能く
能く能く能く能く能く

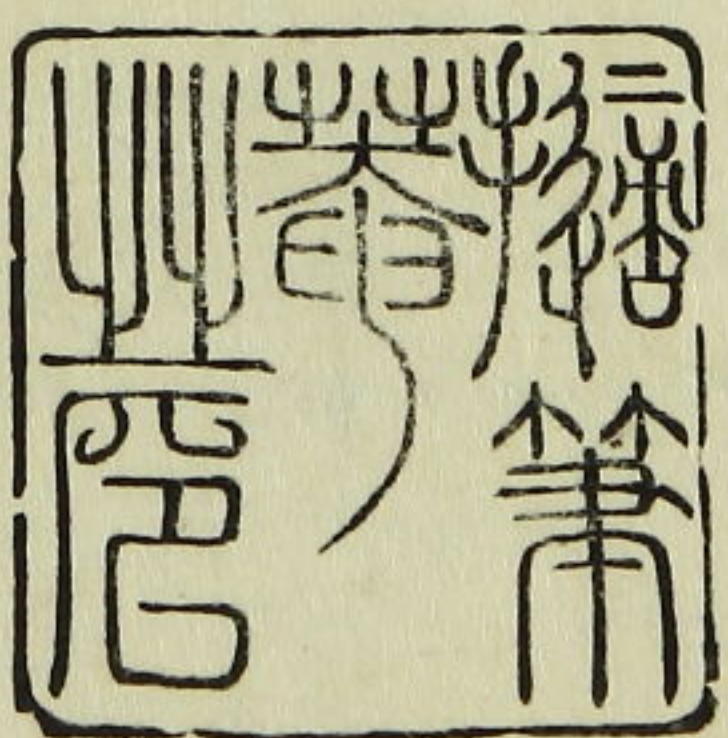
自在の〜 賤も短才も
曲其詩をあらざるは是を以て乞
思ふふの筆の愚かきも
彼ははく州木島嶽の如き
とある類も〜 自享元祿
の頃か離風哉〜 又哉
味心句哉試る森青の
海上人の鬼〜 社部評

傷地〜 五七五句
〜 句
此道〜 風園
泊る集哉
支考の爰り飽く補
有る〜 其際
〜 都合百三十余句
〜 句

志の如くはるかにては命
毛の如くはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命

ゆゑに我觀を彼乾坤無位の
置て固る三人と何れか
の如くはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命
あつたはるかにては命

惟昔うゑと成平は〜蓬生の
〜の言〜の言
日擲筆菴主人自序



凡例

- 一 四季の題を大抵玉海集此の書に小擬
ひてその難を其季の末小裁す
- 一 連歌は月ひさる題ハ思意を〜せし
て類の所く小記ス
- 一 月花はむすひも句をその句意と量
く難れ部小入れ
- 一 世集小引用書間字なども入れし鳥

馬馬乃誤りしるゝと云はれ
 一 け集衆人の見小觸く後校合の委し
 かききると知用を再校し粗その誤と補
 して猶後人之参考紙傳



越人精尾冠よ
 似合しや新平
 ありとて来事
 と何とて考へ

春之部

蓬萊よ伊勢はるの使
 幸と猿しるせ猿の面
 之日ふ田毎の目と云はれ
 誰やうの母と似るまの朝の春
 多し人うあふとていふは花は春
 とて新平のうとて来事
 空けよ酒無しとて日暮
 春とて酒無しとて日暮

句選上

二日よとつりせしおらたをき

湖沼の景を養ふをたむらひ

三日閉口 題四日

又浮城の筆のしるしは

莫き弱よりあまきうのあまき

一とまに一夜はまのなかに

まきまはまのしるしは

まきまはまのしるしは

大日枝也一は引様一

うりまはまのしるしは

大日枝也一は引様の
しるしはまのしるしは
まきまはまのしるしは
まきまはまのしるしは

うりまはまのしるしは

梅の香ふのしるしは

山にまはまのしるしは

人もまはまのしるしは

春もまはまのしるしは

梅白しるしは

子に詠の後、梅のしるしは

柳のしるしは

錢乙州東武行

梅若菜のしるしは

細代民部公卿

梅の末ふ花のしら木もあはれ
さくゆきのしら木に梅の花
旅のしら木古葉を梅の末にりり

梅の末ふ花

暖葉の奥のしら木に梅
ゆ人ゆきのしら木に梅
さくゆきのしら木に梅

さるゆきのしら木に梅の花

防川亭

梅の末ふ花
あはれ

香枝さくら梅のしら木に梅
子さくゆきの梅の花
さるゆきのしら木に梅の花
何れ新八も梅のしら木に梅
父梅のしら木に梅
あはれ梅のしら木に梅
梅の末ふ花のしら木に梅

梅の末ふ花のしら木に梅
さる梅のしら木に梅
凍さくゆきのしら木に梅

初年一松の影一あはれ
涅槃と云ふ般ふ合ふ珠散する

伊勢より

神の心も思ふ心は流涅槃像
不世なるあきつらき素乃雨
春雨や枝の葉はふ家根の優
ま雨止む木下にの家一はらみ
わくわくおちる花の影
ハカもさかすむ花の影
さかすむ花の影

後の小文も昔法あり
題のうたもよよよ
はたしとらむ

あまた魂の影も、嬌事
のうたもさかすむ花の影
梅柳のうたもさかすむ花の影
うたもさかすむ花の影
あまた魂の影も、嬌事
梅柳のうたもさかすむ花の影
うたもさかすむ花の影
あまた魂の影も、嬌事
梅柳のうたもさかすむ花の影
うたもさかすむ花の影

よき静か

花さくらさき日ははははあけ

園城のあはれ

おのれは花よりの秋の歌

湖の眺

幸藩の松さきよは

くは花さきよは

くは花さきよは

松信

川の又器は揃り

又和の園

花の信

伊賀

花の信

花の信

一里

花の信

檀の木

花の信

批き三首直素堂、さるるの部浄るり小しとて及た花
句し

親き花のしつとて多の部花の言
さるる室のしつとて多の部花の言

イよ日と花に流しけりやとて花のしつとて多の部花の言
七句と別も花及人四すしつとて多の部花の言
さるる室のしつとて多の部花の言

鶴下りしつとて七日花とて多の部花の言

東行 饒別

此さるる推せしつとて花のしつとて多の部花の言
さるる室のしつとて多の部花の言
露沾るりしつとて多の部花の言

西行 結菴と何んとな花とて多の部花の言

伊勢 神法樂

河津木のしつとて多の部花の言

二見此園花のしつとて多の部花の言

しつとて多の部花の言

桜花のしつとて多の部花の言

さるる室のしつとて多の部花の言

花の小掃花のしつとて多の部花の言

景清もさるる室のしつとて多の部花の言

物皆自得

花の揺るはれあけくひと友すめ
蟠幅もあしむせおとよる
何たさく僧もさくら花の雨
都門あき

都門のさ花や上戸お土産せん

酒のさかしくんうは酔のさ

憂^{ラハ}方^ニ知^レ酒^ハ聖^ク貧^ク

覺^レ錢^ハ神^ク

花のさかを我酒公く食らば

程芽やさおさくら我業りて

小文原のさかす
十五のさくら

木は本ふけも陰をさるるあ
まのあはれはくははるる
おとよるはあまのさくら
空中小花の中さくら
何れもさく酒のさか
山櫻もあきさくら
櫻狩もあきさくら
故主蟬吟さくら庭前
さくら

さくら

山家

鶴居冠より
のこまへへ

鶴居集より
あひまに廿年我強き故人の
命あはれし中よ

加州白山奉納

うさへ海より
あつ七さ七堂
かへつ七
州の
うさへ

明市のやちう魚自然の一寸
鮎子の子
蜆子讚

あつと果也
仗是
我
子
其

由裏離人形
向
上

イニ

松竹梅の目もと
すまへり 儼と
福ね

と子にても任せて代と離の家
青柳の影もささるく 汐干の
水より我勝りたる 魚のさな
る中や物もささるく 魚のさな
やさの影もささるく 魚のさな
花より中よ拍もさな 雀子のさ
るささるく 魚のさな 魚のさな

愛のたぐい
松竹梅
十一

野

父母はささるく 雀子のさ
拍もさな 雀子のさ
雀子とささるく 魚のさな
蝶の影もささるく 魚のさな
起るく 我の友よせんぬる小蝶
古也やかつ川 魚のさな 魚のさ
這出よかいや 下はさな 魚のさ
二股よあれぬり 麻のさな
同友よ ちあさるく 魚のさな

香の煙と練煙
ふつとけは猫乃
ましくまいつま
是かろや

まこと集くは秋の
白くしる後の眼は

命蓮上

麩の角先一ゆらりあまきりか
猫は書篋の崩ゆるまじりけり
まめのに居つるもあや猫乃書
猫の意やゆらぬ乃は月
ふ落まきほやゆらき草

悼 呂丸

菊陣より何れハ探の皇料
古畑了茶ははらり田とと
いらくのまき終りし書乃の
木もは情やまよめくまはま

後のはつちのこころ

能くれをまつまよ花は恒福くぬ

喜 提山

山寺は熱くまはけりよは輝り
茶もまけよまよ見おるあまほふ
ありくろち花のまあは自扱
はくしけりまはは千羅はく女
天和の神の時

山吹や字路を燈は白く時
ほろくく山吹はるの着

尚麗上

山吹のやぶ葉の香はあちかき春の香

望湖水惜春

以素持のあまのこ人へ行くは家

前途のまよひはあまのこ

あまのこは人のちかきと離る

のあまのこはちかき

行まよひのあまのこはあまのこ

初春のあまのこはあまのこ

二月十七日 神谷のあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

子よ離ると中人あまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

追加

白選彫刻は事見陶の白哉
拾めて追加の例も有す

老壩

壩よりまき海若地と老壩書も其
方より田と價も其より其
は白打の壩たよはは壩も其
形もては壩今も其壩も其壩

鶴の巢も其より其壩も其壩
阿蘭陀も其より其壩も其壩
其壩も其壩も其壩も其壩

白送上

又十一

富士小紅橋千のりぬ家よ出川
為し海小氷二布一布り七橋

夏之部

和の川程を後よかひ無衣うへ

日光よと

何と云ふと書きたるは葉の日の光
まらふとて神目か下城と也
及またらふまをひとほとて也
救橋のま津乃わらふ葉の

昔乃舎は画讚

津さくはあふふとて也徳と家

達就尚舎

夏の小文よと書きたる

何と云ふと書きたるは葉の日の光

夏の小文草のあはれ
ふかしのうらま

合記上

十二

あけらねをえとふ秋のさゆふ哉
藤のさゆ藤よりゆき 春つまらふ
さき岸まらぬ奥よそ

木啄も産らるあけの頃ら及まら
河原の浦一見の時

河原まらぬあけの頃ら及まら
幻住菴より

先らぬおむ推の木もあら及まら
たらぬらぬも藤乃ひらぬらぬ
山崎宗鑑の旧詠

あけのさゆふのあけのさゆふ

さゆふのあけのさゆふ

今やあけのさゆふ

牡丹葉のあけのさゆふ

桃隣新定自画自歌

あけのさゆふのあけのさゆふ

あけのさゆふのあけのさゆふ

あけのさゆふのあけのさゆふ

あけのさゆふのあけのさゆふ

あけのさゆふのあけのさゆふ

合記上

十二

不之料理

本... 吉丸... 雨乃... 倉橋舎

袖の... 贈社園子

お田の... 倉橋舎

お... 倉橋舎

愚... 倉橋舎

蝸牛... 倉橋舎

向... 倉橋舎

阿ねてうらあき山中と逢ふ頃

いそぐくとも
夜更に
竹の子や
誰と
たの
後
うら
あき
山中
と逢
ふ頃

竹睡目

竹の子とも
竹の子とも
竹の子とも
竹の子とも

奥別今
おきく
川と
あき

早苗
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

後日
伊母の
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき
あき
あき
あき

あき

また水も増れ浮草とてわたり

大井川あふく留田塚幸成の

しるはるる

五つ雨は空の吹かき大井川

八人堂をよみよるあまの川

あまの川

又月も我集てよ一寂上川

経堂と三将の像と結一之堂

三代は橋をかきぬるは佛を

安んずる

伯加集て高村舎
題して多岐、水
~~~~~

あまの川は流のよきあまの堂

酒の堂顔破

又月もやりあふるよきあまの川

又申お実方お塚はあまの

あまの川はあまの川はあまの川

あまの川の淵越へ

目もあまの川はあまの川はあまの川

あまの川はあまの川はあまの川

あまの川はあまの川はあまの川

あまの川はあまの川はあまの川



去しは極う海は西の益少きて  
 送る具得の潔法せる州廿五  
 二足残さるゝた風流の  
 中のさふあつては事持の次  
 葛蒲州一足もせん草の弦  
 稼ゆは序子にせんか 顔髪  
 正成之像教肝石心此人之情  
 なて一さふか海国や補給者  
 國破るゝた何る城素ゆて  
 事持るゝた何る城素ゆて

友よや兵よもさるゝ  
 殺生石  
 石乃事や友よもさるゝ  
 石乃事や友よもさるゝ  
 眉井を傳めしと ねきり  
 己百亭  
 友よのせん勸む杖ある日を  
 友よのせん勸む杖ある日を  
 陸奥ふ下らんうて下野の



ふまゝに旅立ちに依りて  
しる所は悉く何れに  
かたもよき事なり  
秣負ふ人我枝折れ  
人への言ふ事なき  
は句をいふものなり

麦の穂我ちうらに  
甲斐の國の  
行約は麦の穂を  
なす

伊豆の山軽く  
秋もよき御  
家名我ちうらに  
は建よりと尾張の  
語我ちうらに

ふまゝに旅立ちに依りて  
しる所は悉く何れに  
かたもよき事なり  
秣負ふ人我枝折れ  
人への言ふ事なき

重行亭

ふまゝに旅立ちに依りて  
しる所は悉く何れに  
かたもよき事なり  
秣負ふ人我枝折れ  
人への言ふ事なき



友をうらむかたのうらむる花  
家祇のあつに自のそ

友のあまの遊得のせんまは此  
松花のまゝ花のあまの松花を推酒  
紫陽のまゝ花のあまの紫陽を推酒  
あまのあまの松花を推酒のあまの  
象陽のまゝ花のあまの象陽を推酒  
許六のまゝ花のあまの許六を推酒  
旅人のまゝ花のあまの旅人を推酒  
あまのあまの松花を推酒のあまの

あまの松花を推酒のあまの  
善菩薩の一生杖も柱あまの  
木を推酒のあまの

世の人をうらむかたのうらむる花  
松川のまゝ花のあまの松花を推酒  
あまのあまの松花を推酒のあまの

水鶴のあまの松花を推酒のあまの  
大津湖仙亭  
けのあまの松花を推酒のあまの  
あまのあまの松花を推酒のあまの



種籾もさへかきみの蟬の音

山形願ふ立石寺の音

あゝ佳景寂寞として

心ざらぬの

園や山石もさへ入蟬おほき

盤赤しりすまの像よ

惜し

園石もさへかき人の音

の石夜泊

惜しきやしのあはれもさへ月

種籾もさへかき  
はしきもさへかき  
友のふたもさへかき  
山形願ふ立石寺  
あゝ佳景寂寞として  
心ざらぬの

友の月神油もさへかき

又井川もさへかき

目もさへかき

あゝ佳景寂寞として

空は青く日影もさへかき

湖や暑もさへかき

六月もさへかき

はらばらもさへかき

文山の像

空は青く日影もさへかき

種籾

種籾







命題上  
さくらばりんと暮掛しののの  
まきかへん人の福多きしは信小  
唐哉かへんあきかへん

海よりくろくちの川に鮎鮎  
あきかへん山あきかへん上の鮎の鮎  
松魚くろくちあきかへんあきかへん  
福倉哉生るあきかへんあきかへん  
あきかへんあきかへんあきかへん  
葉のきくよ自哉くろくちあきかへん  
あきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

岐阜山

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

晋剛のあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

野明亭

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

あきかへんあきかへんあきかへんあきかへんあきかへん

向難上



海老野我翁の遺言

望水齋

昔は城を築くは

海老野の遺言

海老野の遺言

海老野の遺言

海老野の遺言

海老野の遺言

海老野

海老野の遺言

海老野の遺言

川中の根木

唐破風

川風

版

破

酒田

海老野

海老野

海老野

海老野



秋の夜更けの静けさ  
初也我の心静けさ  
友の秋也心静けさ  
梅の枝も静けさ  
友の秋也心静けさ  
夏山よ足跡も静けさ  
有るも静けさ  
静けさ静けさ

追加

晋子母追善

卯好も母も追善  
甲斐山中

山崎の静けさ  
静けさ静けさ  
自善子也時雨乃花好  
静けさ静けさ  
静けさ静けさ



夕  
暮  
色  
中  
の  
静  
け  
な  
空  
を  
見  
て  
思  
ふ  
事  
多  
し



